

アバール語ホトダ村方言のいくつかの 特徴について*

山田 久 就

1. はじめに

本稿の目的は、アバール語の一方言、ホトダ村で使われているアバール語の特徴を示すことにある。アバール語はダゲスタン諸語（北東コーカサス諸語とも呼ばれる）に属し、ロシア連邦ダゲスタン共和国で主に話され、アゼルバイジャンおよびグルジアでも話されている。アバール語の標準語はフンザフ（ロシア語で Хунзах [xunzax]）村を中心とするフンザフ地方の方言（フンザフ方言）が基礎になっている¹。アバール語は大きく北部方言と南部方言に区別されるが、標準語の基礎となっているフンザフ方言は北部方言に属する。一方、本稿が対象とするホトダ村方言は南部方言に属する。ホトダ村はヒダス地方にあり、ホトダ村方言はヒダス方言に属する。ヒダス方言とは、ヒダス地方にある七つの村とその外にある二つの村で使われている方言である。ヒダス地方というのは昔から使われている名称であるが、行政管区ではない。行政管区としてはヒダス地方はシャミール地区（шамилский район）に含まれる。ヒダスはロシア語では Гидатль [gidatʲ]、アバール語の標準語およびヒダス方言では Гьидальль [hidatʲ] である。表1にヒダス方言が使われている九つの村をロシア語、アバール語の標準語、ヒダス方言で示す。表1にある村でフチャダ村はシャミール地区にあるが、ヒダス地方にはない。また、ウルフ・ソタ村はチャロジン地区（Чародинский район）にある。

ヒダス方言についての記述は Mikailov (1959 : pp296-384) にあるのが唯一である。Mikailov (1959) はアバール語の方言の全般を記述したものである。本稿では、アバール語のホトダ村方言の特徴を標準語と比較しながら示

表1

	ロシア語	標準語	ヒダス方言
ウラダ村	Урада [urada]	Гӱрада [ʕurada]	Гӱрада [ʕurada]
ティディブ村	Тидиб [tidib]	Тӱидиб [tʰidib]	Кӱиди [tʰidi]
ナキトゥ村	Накитль [nakitʲ]	НакӱКӱКӱ [nakʰkʰiʃʰ]	НакӱКӱКӱ [nakʰkʰiʃʰ]
ホトダ村	Хотода [xotoda]	Хӱотода [hotoda] /Хӱототӱа [hototʰa]	Хӱодоʼа [hodoʔa]
ヘンタ村	Гентаб [gentab]	Гӱентӱа [hentʰa]	Гӱенкӱӱа [hentʰʰa]
サフ村	Тлях [tʲʌx] /Тлах [tlax]	Лӱахъ [ʎakʰ]	Лӱах [ʎax]
マチャダ村	Мачада [maʃada]	МачӱЧӱада [maʃʰʃʰada]	МачӱЧӱада [maʃʰʃʰada]
フチャダ村	Хучада [xuʃada]	Ххучада [xxuʃada]	Ххучада [xxuʃada]
ウルフ・ソタ村	Урух-Сота [urux-sota]	Гӱурухъ-Сотӱа [ʕurukʰ-sotʰa]	Гӱурух-Соʼа [ʕurux-soʔa]

すとともに、Mikailov (1959) で記述されているヒダス方言とも比較してヒダス方言の中でのホトダ村方言の特徴についても言及していく。

Mikailov (1959 : p 384) はヒダス方言を次の四つの下位方言に分けている。(1)ウラダ村, ティディブ村, ホトダ村, (2)サフ村, (3)マチャダ村, (4)ウルフ・ソタ村の方言である。ナキトゥ村はティディブ村の分村としているので、ナキトゥ村の方言は下位方言(1)に属するのであるが、ヘンタ村の方言についてはどの下位方言に属するのかは言及されていない。また、Mikailov (1959) はヒダス方言が使われている村にフチャダ村の名前をあげていない。Mikailov (1959 : p 384) によると下位方言(1)が中心的な下位方言であるということで、本稿で扱うホトダ村方言はヒダス方言の中でも中心的な方言の一つということになる。

以下では、2節で音声・音韻の側面について述べ、3節で形態・統語の側面について言及していくことにする。

2. 音声・音韻

アパール語の標準語で使われる母音は, [i] (и), [e] (э, е), [a] (а), [o] (о), [u] (у)の五つである²。ホトダ村方言でも同様にこの五つの母音が使われる。さらに, ホトダ村方言は五つの母音それぞれに対して鼻母音を持っている。この鼻母音は動詞の過去形の語末においてのみ現れる。

標準語で使われる子音は表2の通りである。接近音の [j] はロシア語同様後続の母音と一緒に一文字で, е [je], я [ja], ё [jo], ю [ju] と表記されることが多い。

標準語では使われるが, ホトダ村方言では使われない音は, [ʈ] (ʈ) と [kʰ] (хʰ) である。標準語の [ʈ] (ʈ) のほとんどはホトダ村方言では [s] (с) となり, 標準語の [kʰ] (хʰ) のほとんどはホトダ村方言では [x] (х) となる。

一方, 標準語では使われないが, ホトダ村方言では使われる音は, 破裂音 (放出音) の [pʰ] (пʰ), 破擦音の [tʃ] (тч), 側面破裂音 (放出音) の [tʰ] (кʰI) である。

表 2

破裂音	[p] (п), [t] (т), [k] (к), [ʔ] (ʔ)
	[b] (б), [d] (д), [g] (г)
破裂音 (放出音)	[tʰ] (тʰI), [kʰ] (кʰI)
摩擦音	[f] (ф), [s] (с), [ʃ] (ш), [ç] (хʰ), [x] (х), [h] (хI), [ɦ] (гʰ)
	[z] (з), [ʒ] (ж), [ʎ] (гʰʰ), [ʝ] (гʰI)
破擦音	[ʈ] (ʈ), [tʃ] (тч), [kʰ] (хʰ)
破擦音 (放出音)	[tʃʰ] (тчʰI), [tʃʰ] (тчʰI), [kʰʰ] (кʰʰ)
側面摩擦音	[ʎ] (лʰ)
側面破擦音 (放出音)	[tʃʰ] (кʰ)
側面音	[l] (л)
ふるえ音	[r] (р)
接近音	[j] (й), [w] (в)
鼻音	[m] (м), [n] (н)

[p'] (пI) は къапIле [kʰap'le] の他 2, 3 の単語でしか使われていない。

[ɟ] (дж) は、アラビア語由来の単語に現れる。標準語では、摩擦音の [z] (ж) となる。Mikailov (1959 : p 305) は、ウラダ村方言では джуджахI [ɟuɟan] だけでこの音が現れ、マチャダ村方言とウルフ・ソタ村方言では джуджахI [ɟuɟan] および Джамалдин [ɟamaldin], Джамилат [ɟamilat], Джавгъарат [ɟawharat] などの標準語では [z] (ж) で始まるアラビア語由来の名前でこの音が現れると述べている。ホトダ村方言では, джуджахI [ɟuɟan], джаназа [ɟanaza], джергъен [ɟerɣen], джюз [ɟuz], наджас [naɟass], джиргъле [ɟirɣle], джваргъи-дваргъи [ɟwarɣi-dwarɣi] でこの音が現れる。ホトダ村方言では, 標準語で [z] (ж) で始まるアラビア語由来の名前は Жамалдин [z'amaldin], Жамилат [z'amilat], Жавгъарат [z'awharat] と標準語と同様に [z] (ж) で発音され, Джамалдин [ɟamaldin], Джамилат [ɟamilat], Джавгъарат [ɟawharat] とはならない。

[t'] (къI) に関しては, 標準語の [t'] (тI) の一部がホトダ村方言で [t'] (къI) となる。

3. 形態・統語

アバール語の標準語とホトダ村方言の形態・統語の側面に関して名詞, 動詞の順に説明していく³。

3.1 名詞

アバール語の標準語でもホトダ村方言でも名詞(代名詞等を含む)は数と格で変化する。変化の種類という観点から見ると標準語とホトダ村方言で違いはなく, 標準語とホトダ村方言での違いはいくつかの変化形の接辞の違いである。

アバール語の標準語およびホトダ村方言の名詞の変化は単数名詞では三つの変化型に分類される。第1変化型に属するのは人間の男性を表す名詞だけ

である。第2変化型に属するのは人間の女性を表す名詞と人間以外を表す名詞である。第3変化型に属するのは人間の男性、女性および人間以外を表す名詞である。すなわち、人間の男性を表す名詞の一部は第1変化型となり、残りは第3変化型になる。人間の女性を表す名詞の一部は第2変化型となり、残りは第3変化型になる。同様に、人間以外を表す名詞の一部は第2変化型となり、残りは第3変化型になる。複数名詞の変化型は一つだけである。

標準語およびホトダ村方言は絶対格、能格、属格、与格およびそれぞれ5系列からなる位格（場所「～で、～に」を表す）、向格（目的地、着点「～に、～へ」を表す）、奪格（出発地、起点「～から」を表す）を持っている。さらに、5系列の奪格のそれぞれに接辞-nがついて経路格（経由地「～を通して」を表す）が作られる⁴。位格、向格、奪格、経路格の第1系列から第5系列の基本的な意味はそれぞれ「～の表面、～の上」、「～(人間など)の所」、「～(平面など)の中」、「～の下」、「～(立体など)の中」である。以下では、最初に絶対格、能格、属格、与格について述べ、次に位格、向格、奪格について述べることにする。

標準語とホトダ村方言で第1変化型および第2変化型に属する名詞の絶対格、能格、属格、与格の変化は共通である。標準語とホトダ村方言に共通する第1変化型および第2変化型に属する名詞の絶対格形、能格形、属格形、与格形を was「男の子」と jas「女の子」を例に表3に示す⁵。

第1変化型では絶対格形が基本形となり、能格形では-ass、属格形では-assul、与格形では-asseが絶対格形に付加されている。第2変化型でも絶対格形が基本形となり、能格形では-aŋ, 属格形では-aŋul、与格形では-aŋe

表3

	第1変化型	第2変化型
絶対格	was	jas
能格	was-ass	jas-aŋ
属格	was-assul	jas-aŋul
与格	was-asse	jas-aŋe

が絶対格形に付加されている。見方を変えると、第 1 変化型では絶対格形に -ass, 第 2 変化型では絶対格形に -aɬɬ が付加されて能格形ができ、第 1 変化型, 第 2 変化型の両方でそれぞれの能格形に ul が付加されて属格形ができ、e が付加されて与格形ができています。

第 3 変化型の名詞の絶対格, 能格, 属格, 与格の変化は標準語とホトダ村方言で違っている。表 4, 5, 6 に Muhammad<名前>, ʕisa<名前>, botʕi「家畜」を例に標準語とホトダ村方言の第 3 変化型の名詞の絶対格形, 能格形, 属格形, 与格形を示す。

第 3 変化型の名詞の絶対格, 能格, 属格, 与格の変化における標準語とホトダ村方言との大きな違いは、能格形と与格形で起こる。標準語の能格形が

表 4

	標準語	ホトダ村方言
絶対格	Muhammad	Muhammad
能格	Muhammad-itsa	Muhammad-id
属格	Muhammad-il	Muhammad-il
与格	Muhammad-ije	Muhammad-e

表 5

	標準語	ホトダ村方言
絶対格	ʕisa	ʕisa
能格	ʕisa-ɬɬa	ʕisa-d
属格	ʕisa-l	ʕisa-l
与格	ʕisa-je	ʕisa-j

表 6

	標準語	ホトダ村方言
絶対格	botʕi	botʕi
能格	botʕi-utsa	botʕi-od
属格	botʕi-ul	botʕi-ol
与格	botʕi-uje	botʕi-oj

tsa で終わるのに対して、ホトダ村方言では d で終わる。また、標準語の与格形が ije, aje, oje, uje で終わるのに対して、ホトダ村方言では e, aj, oj, uj で終わる。Mikailov(1959 : p 332)は標準語で ije, aje, oje, uje で終わっている与格形はヒダス方言では全て e となると述べているが、ホトダ村方言には aj, oj, uj で終わる与格形が多く見られる。

世界の諸言語には、名詞、代名詞の一部だけが絶対格・能格型であり、残りは中立型あるいは主格・対格型である言語も多くある。アバル語の標準語では名詞、代名詞の全てが絶対格・能格型である。すなわち、自動詞の S, 他動詞の A, O の格表示において、自動詞の S と他動詞の O を一つの格（絶対格）で示し、他動詞の A を別の格（能格）で示す。ところが、アバル語の方言には名詞、代名詞の一部が絶対格・能格型ではない方言がある。Mikailov (1959 : pp370-371) はヒダス方言では 1 人称複数形（除外および包含）、2 人称複数形は能格形を持っておらず、他動詞の A も自動詞の S, 他動詞の O と同様に絶対格の形で表されるとしている⁶。しかし、ホトダ村方言は、このような体系にはなっておらず、1 人称複数形（除外および包含）、2 人称複数形も他の名詞、代名詞と同じように絶対格・能格型となっている。自動詞の S と他動詞の O を niz (1 人称複数除外形), niɬ (1 人称複数包含形), nuɬ (2 人称複数形) という絶対格形で表示するのに対して、他動詞の A には nized (1 人称複数除外形), niɬed (1 人称複数包含形), nuɬed (2 人称複数形) という能格形が使われる。

次に、位格、向格、奪格の変化について述べる。標準語およびホトダ村方言の第 1 変化型、第 2 変化型、第 3 変化型の 5 系列の位格の接尾辞をそれぞれ表 7, 8, 9 に示す。ただし、第 1 変化型には第 5 位格はない。第 2, 3 変化型（表 8, 9）の第 5 位格における AM は一致標識を意味し、一致標識は第 5 位格名詞が現れる節にある絶対格名詞が(1)男性名詞・単数形, (2)女性名詞・単数形, (3)非人間名詞・単数形, (4)複数形であるかによって、それぞれ w, j, b, r となる。また、第 3 変化型（表 9）における V は母音を意味する。

表 7, 8 より、標準語の第 2 変化型の第 1 位格を除いて、標準語でもホト

表 7

	標準語	ホトダ村方言
1	-assda	-assa, -assʔa, -assda
2	-assuk̄x̄	-assux
3	-assuʃʃ	-assuʃʃ
4	-assuʃʃ'	-assuʃʃ'

表 8

	標準語	ホトダ村方言
1	-alda	-aʃʃa, -aʃʃʔa, -aʃʃda
2	-aʃʃuk̄x̄	-aʃʃux
3	-aʃʃuʃʃ	-aʃʃuʃʃ
4	-aʃʃuʃʃ'	-aʃʃuʃʃ'
5	-aʃʃuAM	-aʃʃunu

表 9

	標準語	ホトダ村方言
1	-(V)da	-(V)ʔa, -(V)da
2	-(V)k̄x̄	-(V)x
3	-(V)ʃʃ	-(V)ʃʃ
4	-(V)ʃʃ'	-(V)ʃʃ'
5	-(V)AM, -(V)niAM	-(V), -(V)nu

ダ村方言でも第1変化型および第2変化型の能格形に第1変化型と第2変化型で共通の要素が付加されて第1－5位格の接尾辞ができてることがわかる。標準語の第2変化型の第1位格では、能格のʃʃが1に変わったものにdaが付加されている。

向格、奪格と位格の対応関係は次のようになっている。標準語でもホトダ村方言でも第1系列では、位格の最後のaをeに変えると向格になり、位格にssaを加えると奪格になる。第2－4系列では、位格にeを加えると向格になり、位格にaを加えると奪格になる。標準語の第5系列では、位格にeを加えると向格になり、位格の最後の一致標識を除いてssaを加えると奪格に

表 10

位格	向格			
	単数			複数
	男性	女性	非人間	
i	e	e	ibe	ire
u	e	e	ube	ure
o	oj	oj	obe	ore

なる。標準語の第5系列の位格が一致標識を含んでいるのに対して、ホトダ村方言の第5系列の位格は一致標識を含んでいない。しかし、ホトダ村方言の第5系列の向格では一致標識が現れる。ホトダ村方言の第5系列の位格と向格の終わりの部分の対応は表10のようになる。

ホトダ村方言の第5系列の奪格は位格に ssa が加わってできる。

標準語もホトダ村方言も絶対格の複数形は多くの場合-al, -jal あるいは-bi で作られる。複数形の絶対格が-al, -jal である場合、標準語でもホトダ村方言でも能格は-az, -jaz となる。一方、複数形の絶対格が-bi である場合は、標準語とホトダ村方言の間に違いがあり、能格形は、標準語では-baz あるいは-buz となるのに対して、ホトダ村方言では-biz となる。標準語でもホトダ村方言でも、複数の属格形、与格形および位格形、向格形、奪格形は能格形に単数の第1変化型、第2変化型の場合と同じものが付加されてできあがる。

3.2 動詞

主に主節で使われる変化形から始めることにする。アバール語の標準語もホトダ村方言も、主に主節で使われる動詞の変化形として直接法の現在形、過去形、未来形（以下、単に現在形、過去形、未来形と呼ぶ）および命令形を持っている。

アバール語の標準語でもホトダ村方言でも動詞はいくつかの変化型に別れる。アバール語において動詞では不定形が見出し語として使われるが、標準語では、不定形の終わりが(1)-ize, (2)-ine, (3)-eze, (4)-ene, (5) a-ze, o-ze, u-ze

のどの形式をしているかで変化型が決まり、さらに(1)-ize と(3)-eze が二つの変化型に分かれる。一方、ホトダ村方言では、不定形の終わりが(1)C-le, (2)C-ne, (3)-ele, (4)-ene, (5) a-le, o-le, u-le のどの形式をしているかで変化型が決まり、さらに(1)C-le と(3)-ele が二つの変化型に分かれる。C は子音を意味する。

標準語の動詞では大多数は不定形の終わりが-ize の形式をしている。それに対応するホトダ村方言の動詞は不定形の終わりがC-le の形式をしている動詞である。この形式をしている動詞、標準語の hikx'-ize「尋ねる」とホトダ村方言の hikx'-le「尋ねる」の現在形、過去形、未来形、命令形を例として表 11 に示す。表 11 から標準語とホトダ村方言で多くの変化形の接辞が違っていることがわかる。

ここで、基本動詞の一つである存在動詞について述べることにする。存在動詞は、標準語では AMuk'-ine であるのに対して、ホトダ村方言では AMuɸ-ne となる⁷。Mikailov (1959) では、ヒダス方言の動詞の過去形を説明している箇所 (pp346-348) で存在動詞 AMuɸ-ne の過去形を示していないが、いくつかの箇所で使われている例文から AMuɸ-ne の過去形は AMaɸ-aⁿ または AMuɸ-aⁿ であることがわかる。また、Mikailov (1959 : p 352, p 359) によると、存在動詞 AMuɸ-ne の現在形は AMaɸ-ana または AMuɸ-ana である。ホトダ村方言では AMuɸ-ne の過去形は AMaɸ-aⁿ であり、現在形は AMaɸ-ana である。過去形 AMuɸ-aⁿ、現在形 AMuɸ-ana は使われない。

次に、現在形、過去形、未来形、命令形の否定形を標準語の ab-ize「言う」

表 11

	標準語	ホトダ村方言
過去	hikx'-ana	hikx'-a ⁿ
現在	hikx'-ula	hikx'-ina
未来	hikx'-ila	hikx'-la
命令	hikx'-e	hikx'-e

とホトダ村方言の ab-le 「言う」を例にして表 12 に示す。

Mikailov (1959 : p 362) は、ヒダス方言の命令形の否定形（禁止形）は全体として ge で終わり、マチャダ村方言だけが go となるとしている。しかし、ホトダ村方言の命令形の否定形は ge ではなく go で終わる。Mikailov (1959 : p 384) は、ヒダス方言を下位区分する際に、ウラダ村、ティディブ村、ホトダ村の方言からマチャダ村方言を区別する基準にこの go の形式をあげているが、ホトダ村方言でも go となることから、下位区分とその基準に関して再考が必要である。

名詞を修飾する場合の動詞の形式を形容詞的分詞形と呼ぶと、アバル語の標準語もホトダ村方言も形容詞的分詞形の現在形、過去形、未来形を持っている。表 13 に標準語とホトダ村方言の形容詞的分詞形の過去形を標準語の hikx'-ize とホトダ村方言の hikx'-le を例に示す。アバル語の形容詞および動詞の形容詞的分詞形は修飾する名詞が(1)男性名詞・単数形、(2)女性名詞・単数形、(3)非人間名詞・単数形、(4)複数形であるかで語末が違っているので、それぞれを別々に示している。

形容詞的分詞形の過去形は標準語とホトダ村方言で基本的には共通の形式

表 12

	標準語	ホトダ村方言
過去	ab-ij'o	ab-ʔo
現在	ab-ularo	ab-inaro
未来	ab-ilaro	ab-laro
命令	ab-uge	ab-ogo

表 13

		標準語	ホトダ村方言
単数	男性	hikx'-araw	hikx'-aro
	女性	hikx'-araj	hikx'-are
	非人間	hikx'-arab	hikx'-ara(b)
複数		hikx'-aral	hikx'-ara(l)

をしている。しかし、標準語では、接尾辞-ara-に(1)男性名詞・単数形, (2)女性名詞・単数形, (3)非人間名詞・単数形, (4)複数形を示す接尾辞 w, j, b, l が付加しているのに対して、ホトダ村方言では(1)男性名詞・単数形, (2)女性名詞・単数形の場合で二つの接辞が aw → o, aj → e という形で音声・音韻的に融合してしまっている。また, (3)非人間名詞・単数形, (4)複数形を示す接尾辞 b, l は現れることもあるが、現れないことが多い。

形容詞的分詞形の現在形と未来形, 過去・否定形, 現在・否定形, 未来・否定形はそれぞれの直接法の形式から作られる。それぞれの変化形から最後の母音 a, o を除いて、標準語では, -ew, -ej, -eb, -el が付加され、ホトダ村方言では -o, -e, -a(b), -a(l) が付加される。表 14 が形容詞的分詞形の現在形の例である。

アパール語の標準語にもホトダ村方言にも進行相を表す形式がある。標準語で進行相を表すには、形容詞的分詞形の現在形と存在動詞 AMuk'-ine の組み合わせが使われる。存在動詞はいろいろな変化形で使うことができる。hikx'-ize の過去進行形は hikx'-uleAM AMuk'-ana となる。一方、ホトダ村方言では、進行相を表すのに標準語とは違った形式、すなわち、現在形と存在動詞 AMuʔ-ne の組み合わせを使用する。hikx'-le の過去進行形は hikx'-ina AMaʔ-aⁿ となる。

アパール語の標準語には、直説法の過去形とは別に、習慣的過去(よく～した)を表す変化形があり、現在形 + -an の形式を用いる。hikx'-ize では hikx'-ula-an となる。一方、ホトダ村方言では、標準語とは違って、習慣的過去を表すのには過去進行形と同じ形式を用いて表す。hikx'-le では hikx'-ina

表 14

		標準語	ホトダ村方言
単数	男性	hikx'-ulew	hikx'-ino
	女性	hikx'-ulej	hikx'-ine
	非人間	hikx'-uleb	hikx'-ina(b)
複数		hikx'-ulel	hikx'-ina(l)

AMaʁaⁿ となる。標準語では、過去進行形の形式を用いて習慣的過去を表すことはできない。

従属節で主に使われる動詞の形式には、不定形、動名詞形、副詞的分詞過去形、副詞的分詞現在形などをはじめ、いろいろな形式が用いられる⁸。不定詞形、動名詞形の基本的な使われ方は英語の不定詞形、動名詞形の使われ方に近い。動名詞形は名詞のように格変化を行う。標準語で hikʁ'-ize の動名詞形（絶対格）は hikʁ'-i となり、ホトダ村方言で hikʁ'-le の動名詞形（絶対格）は hikʁ'-i となり、全く同じ形式をしている。不定詞形、動名詞形の使われ方は標準語とホトダ村方言でほぼ同じである。

動詞／節を修飾する副詞的な従属節の作り方および用法には標準語とホトダ村方言で多くの違いがある。副詞的な従属節で最も基本的なものから始める。「～して」というような意味を持っている形式を副詞的分詞過去形、「～しながら」というような意味を持っている形式を副詞的分詞現在形と呼ぶことにする。表 15 に、標準語の hikʁ'-ize とホトダ村方言の hikʁ'-le の副詞的分詞過去形および副詞的分詞現在形を示す。

Mikailov (1959 : pp357-358, p384) では、ヒダス方言の副詞的分詞過去形は全体としては mu で終わり、マチャダ村方言、ウルフ・ソタ村方言では mo で終わるとなっている。しかし、ホトダ村方言の副詞的分詞過去形の終わりは mo と mu が共に使われている。一方、副詞的分詞現在形は標準語でもホトダ村方言でも現在形に接尾辞-go を付加して作られる。

アバル語の標準語には、動名詞形 + dal という形式があり、「～したので」という意味で使われる。まれに「～して、～した時」という意味で使われるが、この用法はなんらかの方言からの影響かもしれない。ab-ize(動名詞

表 15

	標準語	ホトダ村方言
過去	hikʁ'-un	hikʁ'-umo/hikʁ'-umu
現在	hikʁ'-ulago	hikʁ'-inago

形は ab-i) では ab-idal となる。Mikailov (1959 : pp359-360) は、標準語の動名詞形 + dal はヒダス方言では語幹 + da の形式となるとしている。ホトダ村方言も語幹 + da という形式がある。しかし、この形式は単独では用いられることがなく、naxe「～の後ろに〈位置関係〉、～の後で〈時間関係〉」あるいは xadu「～の後で〈時間関係〉」を後ろに従えて、「～した後で」を意味する。ホトダ村方言では、語幹 + da という形式とともに語幹 + dassa という形式があり、この形式も単独では用いられることがなく、naxe「～の後ろに〈位置関係〉、～の後で〈時間関係〉」あるいは xadu「～の後で〈時間関係〉」を後ろに従えて、「～した後で」を意味する。

アバル語では形容詞および動詞の形容詞的分詞形は名詞を修飾せずに単独で用いられることがあり、この場合、格変化をする。標準語でもホトダ村方言でも形容詞的分詞の第 2 変化型の第 1 奪格形を用いて、「～した後で」という意味を表すことができる。標準語の hikx̄'ize では hikx̄'araldassa となり、ホトダ村方言の hikx̄'le では hikx̄'ara?assa となる。標準語では、例文(1)のように、主節が「～時間～した」のように時間の経過を表している場合にしか単独で使われることがなく、一般的には nakxe「～の後ろに〈位置関係〉、～の後で〈時間関係〉」あるいは xaduAM「～の後で〈時間関係〉」を後ろに伴って「～した後で」という意味を表す。一方、ホトダ村方言では、例文(2)のように形容詞的分詞の第 2 変化型の第 1 奪格形を単独で用いて「～した後」という意味で広く使われる。また、naxe「～の後ろに〈位置関係〉、～の後で〈時間関係〉」を後続させて「～した後で」という意味を表すこともできる。

- (1) Musa x^waraldassa miŋ^ogo mot's' ana.
 Musa 死んだ後 8 月 過ぎた
 「Musa が死んだ後、8 カ月が過ぎた。」
- (2) Rukx̄'e s̄s̄^wara?assa
 家へ 着いた後

Muhamadid hobolaḥḥe ssalam ḥ'uⁿ.
 Muxamad 客へ 挨拶 与えた
 「家に着いた後で、Muxamad は客に挨拶をした。」

ホトダ村方言では例文(2)のように形容詞的分詞の第1奪格形が単独で用いられるような文を標準語で表すと、例文(3)のように nakḫe 「～の後ろに〈位置関係〉、～の後で〈時間関係〉」あるいは xaduAM 「～の後で〈時間関係〉」が付加される。

(3) Rokḫ'owe ṣṣ^waraldassa nakḫe
 家へ 着いた後
 Muhamaditsa hobolaḥḥe ssalam ḥ'una.
 Muxamad 客へ 挨拶 与えた
 「家に着いた後で、Muxamad は客に挨拶をした。」

標準語では xaduAM 「～の後で〈時間関係〉」、nakḫe 「～の後ろに〈位置関係〉、～の後で〈時間関係〉」の両方とも形容詞的分詞の第2変化型の第1奪格形に接続することがある。一方、ホトダ村方言では naxe 「～の後ろに〈位置関係〉、～の後で〈時間関係〉」は形容詞的分詞の第2変化型の第1奪格形に接続することがあるが、xadu 「～の後で〈時間関係〉」は形容詞的分詞の第2変化型の第1奪格形に接続することはない。

最後に、日本語の「～のように」にあたる形式について述べる。アバール語の標準語およびホトダ村方言には日本語の「～のように」にあたる形式が二つある。日本語で「太郎が言うように」というと、(1)「太郎が言うことにしたがって」と(2)「太郎が言うことを目指して」というような二つの意味がある。ただ、日本語で「太郎が言ったように」と過去形でいうと(1)「太郎が言ったことにしたがって」というような意味しかない。アバール語の標準語では(1)の「～のように」は、ab-ukḫe のように -ukḫe, -akḫe で終わる形式で

表され、(2)の「～のように」は、ab-uledukɤ, ab-iledukɤのように動詞の現在形あるいは未来形から最後の a を省き、edukɤを付加した形式で表される。

Mikailov (1959 : p 360) は、(1)「～のように」は、ヒダス方言で-udaxe, -adaxe で終わる形式が使われるとしている。ホトダ村方言では-udaxe, -adaxe とともに-uxe, -axe という形式が使われる。ab-le には ab-uxe および ab-udaxe が使われる。

(2)の「～のように」という意味はホトダ村方言では現在形 + -an の形式で表す。ab-le では ab-ina-an となる。

4. おわりに

本稿ではアバル語のホトダ村方言の音声・音韻および形態・統語に関して標準語および Mikailov (1959) で述べられているヒダス方言全般と比較しながらいくつかの特徴を述べた。筆者はヒダス方言の研究の第一歩としてホトダ村方言の調査・研究を行っている。Mikailov (1959) が書かれて約半世紀が過ぎているのであるから、ホトダ村方言を含むヒダス方言はその程度はわからないが確実に変化しているであろう。そのため、Mikailov (1959) を参考にしながら、ヒダス方言全般の調査・研究ならびに内部比較を行う必要があると思われる。

注

- * 本稿の元となる研究において Isalmagomedov, Isalmagomed M.氏を中心に多くの方にアバル語ホトダ村方言のインフォーマントになっていただいた。ここで、感謝の意を申し上げたい。当然のことながら、例文の文法性、容認性に関する最終的な判断は筆者によるものであるし、記述内容に誤りがあった場合の責任は筆者にある。本稿は文部科学省科学研究費補助金(若手研究(B))、研究課題：『現地調査とデータベース作成によるアバル語の現状と変容に関する社会言語学的研究』、課題番号：17720076、研究代表者：山田久就、研究期間：2005-7年度)から助成を受けている研究の成果の一部である。

1. ロシア語およびアバル語の表記はキリル文字で行われている。1, 2 節では

- キリル文字表記に加えて発音を並記している。発音は IPA の音声記号を用いて表記しているが、これは厳密なものではなく、だいたいの発音を示すためのあくまでも便宜的なものである。また、アバール語の一般的な表記では、二重子音は子音字二つで表記する場合と子音字一つで表記する場合があるが、二重子音と単子音を区別するために二重子音を常に子音字を重ねて表記することにする。
2. アバール語で使われる母音および子音を説明するのに音声記号を用いているが、厳密なものではなく、最も典型的な発音を示した音素表記に近いものと考えていただきたい。また、発音記号とともに、キリル文字での表記を丸括弧の中に示す。アバール語の標準語では一般的に使われている表記法に従い、ホトダ村方言では Mikailov (1959) での表記法に従っている。
 3. アバール語の標準語の形態・統語について詳しくは Alekseev & Ataev (1997), Bokarev (1949), Madieva (1980) を参照してください。
 4. 3節では、アバール語の標準語およびホトダ村方言をキリル文字から IPA の音声記号に近い形でのラテン文字に転写して表記する。IPA の音声記号を使っているが音声表記をしているわけではなく、あくまでも便宜的な転写である。
 5. ハイフン (-) は語幹と接辞の境界あるいは接辞と接辞の境界を示すために使うことにする。しかし、全ての語幹と接辞あるいは接辞と接辞の境界にハイフンを付けているわけではない。
 6. 1人称複数形には包含形と除外形がある。包含形とは聞き手（2人称）を含めての「私達」であり、除外形とは聞き手を含まない「私達」である。
 7. AM は一致標識を意味し、一致標識は絶対格名詞が(1)男性名詞・単数形, (2)女性名詞・単数形, (3)非人間名詞・単数形, (4)複数形であるかによって、それぞれ w, j, b, r となる。標準語の存在動詞は AMuk'-ine と表記したが、絶対格名詞が(2)女性名詞・単数形の場合, jik'-ine と一致標識の後の母音が u ではなく i となる。
 8. アバール語の標準語の従属節の形式と用法について詳しくは Samedov (1996) を参照してください。

参考文献

- Alekseev, M. E. & B. M. Ataev (1997) *Avarskij jazyk*, Moskva: Academia.
 Bokarev, A. A. (1949) *Sintaksis avarskogo jazyka*. Moskva, Leningrad: Izdatel'stvo AN SSSR.
 Madieva, G. I. (1980) *Morfologija avarskogo literaturnogo jazyka*, Maxachkala: Daguchpedgiz.
 Mikailov, Sh, I. (1959) *Očerki avarskoj dialektologii*. Moskva, Leningrad: Izdatel'stvo AN SSSR.
 Samedov, D. S. (1996) *Slozhnoe predloženie v avarskom jazyke v sopostavlenii s russkim*, Doktorskaja dissertatsija, Maxachkala: Institut Jazyka, Literatury i Iskusstva im. G. Tsadasy DNTsRF.